

《卒論報告》

書字活動における利き手矯正とその在り方について

中田 華子

1. 目的

学校教育において、個性を生かす教育の充実が求められるようになってきた。その中で左利きの児童が増えてきたが、左手書字は不便なことが多い。書字活動においては利き手を矯正した方がよいのであろうか、しない方がよいのであろうか。本研究は、左利きの児童にとってどのような指導が最善であるかを明らかにすることを目的とする。

1. 方法

利き手の決定要因や、戦後から現在に至るまでの書写教育における利き手の意識について文献調査する。また、現在小学校で教鞭をとっている先生方を対象に、利き手による指導の実際や利き手矯正についての意識に関するアンケートを行う。

それらを踏まえ、今後の書字活動における左利き児童への指導の在り方を考察する。

3. 結果

利き手は、生得的に若干の左右差があり、それに加え、個人の環境や経験がその利きの傾向を強めていくことで決定される。

書写教育における利き手の意識については、戦後から昭和 40 年代頃までは利き手を矯正するのが当然であるという意識が強かった。しかし、個性を生かす教育が目指されるようになり、昭和 50 年代頃から徐々に矯正しなくてよいという認識が強まっていった。現在は矯正をしないという考えが一般的である。

利き手の矯正については、どもり、注意力の低下、学業成績の低下、夜尿症、鏡像書字などの障害が生じた例が報告されている。また、矯正に失敗した者はその後の生活満足度も低い傾向がある。

一方、矯正成功者は矯正経験のない者とその後の生活満足度が同じくらい高い。

現行の学習指導要領においては、毛筆書写の指導は硬筆書写の能力の基礎を養うものとして位置づけられている。また、始筆、送筆、終筆などにおいて、毛筆を学習した経験は硬筆書字に良い効果を与える。

4. 考察

書字活動において、障害が生じる可能性があるということから、利き手矯正はしない方がよい。しかし、利きの強さやその後の生活満足度には個人差があることから、絶対に矯正してはいけないということもない。また、書写の指導において利き手を矯正する場合は、毛筆を硬筆に役立てるという観点から、硬筆・毛筆に関わらず、筆記用具を持つ手は統一して指導するべきである。

しかし、いずれにせよ、本人、保護者との相談は必要不可欠である。

5. 主な参考文献

- ・八田武志(2008)『左対右 きき手大研究』化学同人
- ・加藤達成(1984)『書写書道教育史資料 第一巻 理論史・実践史』東京法令出版